

---

# 輝ける星

三谷尾だま

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

輝ける星

### 【Nコード】

N5014BA

### 【作者名】

三谷尾だま

### 【あらすじ】

ある満月の夜に、ルニエはバルコニーで勝手にお月見をしていたラ・コスタと名乗る不思議な少年に恋心を抱く。翌朝、風邪を引いてしまったルニエのところへ診察に訪れた主治医のキュラソーのある発言から、彼がラ・コスタの兄ではないかと疑い始め、次第にそれは……。少女と不思議な少年&主治医の恋愛ファンタジイ。

## はじめに（登場人物）

あらすじ：ある満月の夜に、ルニエはバルコニーで勝手にお月見をしていたラ・コスタと名乗る不思議な少年に恋心を抱く。翌朝、風邪を引いてしまったルニエのところへ診察に訪れた主治医のキュラソーのとある発言から、彼がラ・コスタの兄ではないかと疑い始め、次第にそれは……。少女と不思議な少年&主治医の恋愛ファンタジー。およそ117,000字くらい（未確定）。

全年齢対象、三人称・常に主人公視点。この作品は全年齢対象ですが、このシリーズを全て読もうとすると、R15となります。ただ、既出のキャラクタが出てきはしますが、主人公や作品傾向が異なるため、そのまま続いているわけではないです。

カタカナ表記が少し変わっています。適当に読み飛ばすか、どうしても気になる方は読むのをお止め下さい。

キーワード：恋愛ファンタジー、ほのぼの、歳の差、魔法、ハッピーエンド

< 主な登場人物 >

ルニエ・コルドン：主人公

ラ・コスタ

キュラソー：主治医

コルドン氏：ルニエの父

コルドン婦人：ルニエの母（故人）

ルニエの妹

エル・テソロ：家庭教師

この作品は、以前ブログで掲載していたものを加筆修正したものです。誤字や変換ミスがあれば、お知らせいただけると嬉しいです

(カタカナ表記に関しては、修正しない場合もあります)。伏線やネタバレに関するご感想などありましたら、もくじページのweb拍手やメッセージからどうぞ。

また、エピソードを除き、作中の日付とおおよその時間に合わせ投稿する予定です。各話の文字数などバラつきがありますのでご了承ください。

「お嬢様、そろそろお休みにいられて下さいませ」

「分かっていきます」ルニエ・コルドンは、与えられた自室のソファで本を読んでいた。ドアの向こうから聞こえる声に内心嫌々ながらも機械的に答える。

この応答は今夜、既に三度目。四度目になれば、夜も遅いから早く寝るように、とわざわざ父親が直々に説得しにくるのだ。今度こそ明かりを消して、ベッドに入って寝た振りをしななければならない。

ルニエはもうすぐ十六歳になるというのに、この年になってまだ、十時にはベッドに入って寝なさい、と言ってくる父が信じられなかった。だから、女中と今夜のようなやり取りをどうにか繰り返して、せめて十一時まではベッドに入るのを引き伸ばすようにしている。

4

「わたし……、もう幼い子どもではないのに」溜息を吐いて読みかけの本を畳み、照明を消しながら、ルニエはそう呟いた。

照明を消して初めて気付いたのだが、どうやら今宵は満月らしく、人工的な光源がなくとも、差し込む月光で部屋はまだ仄かに明るい。ルニエは窓の前に立つと、窓ガラス越しに光り輝く月を見ながら、恨めしそうにカーテンを閉めた。

（わたしはもう眠らなければいけないのに、おまえは随分と暢気に輝いているのね）

カーテンによって光が遮断され、辺りが暗闇に限りなく近くなる

と、周りに比べてぼんやりと光っている場所に自然と目が行った。天井から吊り下げられている数々の丸い物体は、太陽系の惑星を再現した模型で、誕生日に父から貰ったものだった。

自分で飾り付けをする、と言ったルニエを父が必死に止めたので、仕方なくその作業を、椅子から落ちても大丈夫そうな人物を選びすぐって任せた。模型は彼によって順番どおりに並べられたが、当然ながら距離の縮尺は滅茶苦茶だった。それ以前に、そもそも忠実に再現すると見映えが悪いためか、全ての惑星の大きさも似たり寄ったりではあったが。

けれど、ルニエはこの模型が気に入っていた。コルドン氏が今までくれた贈り物の中では、きつと一番だ。ただ、その理由は……、と考えると、説得力のあるものを思い付くことはできなかった。曖昧な理由のはつきりとした感情である。

ルニエは昔のことを思い出しながらベッドに滑り込む。

初めコルドン氏は、ごく普通の父親にマスタードをちよつと足した程度のピリツとした人だったが、あれはルニエが七歳のときだった。妻が二人目を産んだあとそのままこの世を去り、彼はそれ以上なにかを失うことを怖れるように、まるで消えた穴を埋めるかのように、残された二人の娘たちを可愛がった。いまになって思うと、可愛がるというよりは過保護がさらに行きすぎた感じで、『母さんの分まで生きる』は父の口癖になった。

それを聞きたびにルニエは母のことを思い出し、父が可哀相になる。だから、できるだけ良い子を装って、できるだけ父の言うとおりにした。彼の気遣いは嬉しかったし、そうすることで自分も親孝行をしているつもりだった。

けれど、ふとルニ工は気付いた。『母さんの分まで生きる』と言われるたびに、肩が少し重くなることに。その圧力の中でも走れそうだったが、ときどき足がもつれて転びそうで、全力ではとても走れそうではなかった。初め少しだったマスタードは次第に入れすぎになって、顔をしかめて我慢しないと涙が出るくらいになってしまったのだ。

眠る時間に関しては、ルニ工は眠りたいという欲求があまりなかったので、最近では七時間以上も寝ていると、寝過ぎで頭がとろけそうになる。かといって、父に睡眠過多であると文句を言うのも気が重い。そしてたどり着いたのが現在の中途半端な作戦だ。

無理やりベッドに横になり、何度も瞬きをするうちに目が暗順応していくのを感じながら、久しぶりに薄く光る模型の太陽と惑星を数える。何度も何度も数え直したが、どうしても一つ足りなかった。

(……太陽と水星、金星、地球、火星、木星、土星、天王星、海王星……)

全部ある。しかし貰ったときは、確かに十個あったはずだ。ルニ工は首を傾げる。

「一体、なにが足りないのかしら？」

考え始めると、それが何なのか気になって気になって、どんどんどんどん眠れなくなっていく。模型が入っていた箱も説明書もとつくに捨ててしまったし、こんな時間にわざわざ誰かに聞くというわけにもいかない。

仕方なくルニエは起き上がると、ベッドの横のランプを置いてある小さな机の上にアロマセラピーに使うポットを置く。水を注ぎ、オイルを垂らし、スウィッチを入れてタイマを合わせた。改めてシートを被ると、部屋の中にそっと満ちていく新しい空気で、深くゆっくりと呼吸をする。

( 良い夢が見られますように…………… )

ルニエは目を閉じた。

ふと、微かに聞こえる鼻歌で、ルニエは目を覚ます。枕元の時計を見ると、短針は2を指していた。

風に揺れる木の葉が擦れるのに似た鼻歌は、不規則に抑揚が取り入れられ、ルニエの心に僅かな不安感と大いなる好奇心を掻き立てた。

(誰かいるのかしら)

前髪を掻き揚げながらゆるゆると起き上がり、辺りを見回す。少し肌寒い。バルコニーへと続く扉の前のカーテンに映る人影。ルニエがやっと気付いたときにはもう、いつの間にか歌は聞こえてこなくなっていた。

急いでカーディガンを羽織り、できるだけ足音を立てないようにゆっくり、少し離れた窓に近寄ると、カーテンの隙間からバルコニーの人物の正体を突き止めようとした。先ほど聞こえた鼻歌が、原形を留めてないくせに、頭の中でやけにリピートされてくる。

隙間から差し込む月明かりは、予想外に強くて眩しい。ルニエは少し目を伏せて、目が慣れるのを待った。

ルニエの部屋にあるバルコニーは、それほど広くない。大体、人が三人並べるくらいで、隣にある妹の部屋にバルコニーはなかった。天気の良い日に椅子を出して座ったりするベンチがあるが、それ以外は特別なにも置いていない。

もう一度外を見たとき、今度は、背の低い男の子が懸命に空を見上げてるのがぼんやりと確認できた。バルコニーは落ちないように、ルニエの胸くらいの高さの手摺がぐるりと取り囲んでいる。どうも男の子はその手摺に腰をかけているのだ。二階であるルニエの部屋に、どうやって彼は侵入したのだろうか。背をこちらに向けているので顔まで見ることはできなかったが、きっとルニエよりは年下だろう。

彼が着ている黒っぽいブレイザには見覚えがあった。魔法学校の制服だ。

こんな真夜中に他人の家のバルコニーで、彼は一体なにをしているのだろうか？ 好奇心はふつふつと煮詰まっていくな。ドキドキする心臓の音が周りにも聞こえそうなくらいに高く鳴る。ついにルニエは、バルコニーへの扉に近付いてノブを回した。鍵がかかっている。ルニエは鍵を外した。

何故だかどうしても、その少年の顔が見たくなって……。

隙間から入り込んだ冷たい風が、扉を押し開けてルニエを包む。

扉は静かに音を立てて開き、その音は少年にも聞こえたはずなのに、彼は振り返ろうとしなかった。ルニエはごくりと唾を飲み込み扉を閉め、そのまま数歩近付いた。

「……きみは、誰？」ルニエの声は静かすぎる夜に染み渡るかのようだ。

躊躇せず尋ねたその声を待っていたかのように、少年がやっと振り向いてにっこり笑う。月の光のせいかな、ルニエには少年の眼が一

瞬だけ赤く見えた。

「誰……………？」少年が質問に答えてくれなかったため、さらになにか特別な答えを期待するようにもう一度尋ね、少年相手に大した警戒心も働かなかつたのもあって、彼の顔をよく見ようと近付く。

風は寒く感じなかった。

キラキラと月の光を浴びている彼は、ルニエが思わず見とれてしまっただけ綺麗だった。色素の薄い髪、青白く照らされた肌、月光の下で強調されているとはいえ、どこか作り物じみて見える少年の容貌を『人形のような』と形容しても強<sup>あなが</sup>ち間違いでない。

「こんばんは、お嬢さん。月の綺麗な夜ですね」彼は大きな目を細める。

彼の声は、まだ高い子どもの声で、こんな月夜には不似合<sup>あ</sup>いだ<sup>う</sup>た<sup>た</sup>。

ルニエは風に流される髪を押さえて、まるで蝶をそっと捕まえようとする子どものように、ゆっくりとさらに近付いた。昔、月夜に妖精<sup>フェアリー</sup>が子どもを攫<sup>さら</sup>いにくる絵本を読んでもらったことがあった。もしかすると、彼もその類<sup>たぐい</sup>なのかもしれない。そのほうが、しっくりとする。

だが、魔法学校の制服を着た男の子の妖精というのも変で、しかも彼の制服は大きすぎて、ぶかぶかだった。

「こんな夜更けに泥棒さん…………、かしら。どんなご用？」

ついに手が届く距離まで来ると、ルニエは改めて少年の顔を見上げる。

一瞬、風が止んだ。

さっきまで耳に響いていた心臓の音も、急に静かになって、いまはもうルニエには聞こえない。

「うーん、僕は、悪い魔法使いに呪いの魔法をかけられていてね。満月の光を浴びないといけないんだ」くすぐったそうにそう言っつて、少年はルニエに顔を近付けた。

息がかかるくらい側にある、吸い込まれそうな瞳を見つめ返す。

「……呪い？」

彼はルニエのぼんやりした呟きに対して「そう……」と答えると、息をするよりも自然にキスをしてきた。

なにが起こったのか、全然解らなかった。

ただ、冷たかった唇が離れると、ルニエは軽い眩暈を感じて手摺を押さえる。驚きで涙が出そうになるのを必死でこらえ、現状を理解しようと少年を見た。

彼は、きよとんとした表情でルニエを見ていた。

「あれ、おかしいな？」彼は首を傾げる。「たしか悪い魔法使いの呪いは、お姫様のキスで解けるって、本に書いてあったのに……」

少年は少し笑うと、ちよつと舌を出した。

「お姫様のキス……？」ルニエは深呼吸をしながら、なかなか洒落のきいた悪戯だと思った。

「あれ？ 怒らないんだ、君は」少し残念そうに、少年は言う。

それを見てルニエは仕方なく微笑んだ。そもそも悪戯の目的は、相手を驚かせたりして反応を楽しむことなので、ルニエが怒らなかつたことは理になつていのだが、本当は怒るところか、ただなにも考えられなかつただけだ。油断していたとはいえ、たとえ悪戯だったとしても、いきなりキスをされるだなんて考えられない。

「ええと、きみの名前、教えてくれる……？」

ルニエが尋ねると、彼は恥ずかしそうに顔を伏せて答える。「僕はラ・コスタ……。名前を聞くつてことは、やっぱり怒ってるんでしょう？」

たしかに、キスをされた相手に興味を持っているのは本当だったが、拗ねたように悪戯をした張本人の彼が言ったので、ルニエは可笑しくて笑ってしまう。

「本当に、怒ってないから……」

ラ・コスタはちらつとルニエを見る。「ふーん、君は悩み多きH型にしては割り切りが良いね。それに、綺麗な青い眼だ……」

ルニエは驚き、血液型を当てられたのを疑問に思うよりもまず、咄嗟に左目を押さえて少し後退した。

(忘れていたわ！ 今日満月だったのに……)

好奇心に駆られて迂闊な行動を取ってしまったことをルニエは悔やむ。その後悔は、舌打ちを何回しても足りないくらいだ。

「何故、隠すの？」ラ・コスタは不思議そうに尋ねると、手摺から飛び下り、ルニエが離れた分だけ近付く。

同じ高さ立つと、ルニエの背が頭一つ分くらい高い。

ルニエはさらに一步後退した。

「ねえ……ルニエ、逃げないで」伸ばしたラ・コスタの手がルニエの髪に触れそうになる。

「目が光るだなんて……、気味が悪いでしょう」ルニエは小さく叫ぶように言っけて目を閉じ、自分自身を隠すために両手で顔を覆う。

しかし、触れそうだった彼の手は、いつまでたつても届く気配はなかった。恐る恐る目を開けて指の隙間から見ると、彼は背を向けてくれていた。

「……ごめん、軽率だった」彼は少し間を置いた。「……それ、青き月の涙」だよ？ 本とか話とかでは知ってたんだけど、実際に持っている人を見るのは初めてだったし、嬉しかったんだ。綺麗で、もつと見たかったから、君が嫌がっているって、すぐに気付けなかつた」

ルニエは左目を隠していた手を離し、悲しみに顔を曇らせる。

『青き月の涙』は、ルニエが持つ形質の名前だ。家族の中では、死んだ祖母とルニエの左眼だけが青かった。しかしそれは、昼間ではほとんど区別がつかず、夜、月の光を浴びて青く淡い光を放つ。

この眼は、ルニエの最大のコンプレクスだった。

「わたし、この眼が嫌いな……、大嫌いなもの！ 普通の青い眼なら良かったのに」ルニエの両方の目から涙が流れた。

「……僕は空が飛べるよ」ルニエに背を向けたまま、ラ・コスタは呟く。

「それは素敵ね……」

そうルニエが答えると、少しの沈黙のあと、再びラ・コスタがそっと呟いた。

「……僕は、普通の青い眼よりも、まるで、月の祝福を受けたみたいな君のその、青い眼が綺麗だと思うよ」

涙は止まらない。しかし、ようやくラ・コスタがルニエを何とかして慰めてくれようとしていることに気付く。これを見た家族以外に、綺麗だと言われたことは初めてだった。お世辞でも嬉しい。月光が照らすその小さな紳士に向かって思わず微笑んだ。

「ありがとう……」

すると、ラ・コスタは続ける。「緑は太陽だけど、青は月の色。僕は気紛れで神秘的な、その青い眼が好きだよ」

緑がどうして太陽の色なのかルニエには分からなかったが、いま流れているのは、きつともう悲しい涙ではないと思った。

昔からルニエは、この眼に閉じてろくな目には合わなかった。それなのに、まさかこんな少年に慰められるとはとても意外だった。深呼吸をして、涙を拭う。

「……もう、こっちを向いても大丈夫よ。これは……、キスの代償ね」

「やっぱり怒ってたんだ」ラ・コスタはボソリと呟き、初めと同じようにゆっくりと振り向く。そして、様子を窺いつつ側に寄ってきた彼は、ルニエの手を取って跪ひざまずいた。

その手もやはり冷たい。

「それはそれは、身に余る光栄。ついで、……といっでは何ですが、今宵、貴女の部屋のバルコニーにお邪魔したことも許していただけますか？」

ラ・コスタのまるで騎士のような行動が可愛らしかったので、ルニエは思わず吹き出しそうになった。だがこらえて、毅然と振舞う王女のように、ラ・コスタの手を軽く握り締める。

「許しましょう。だけど……どうして、この場所にいらっしやったのかしら？」

「知らないの？ ここって、綺麗に満月が見える場所なんだよ。でも……、見つかったちゃうなんて、不覚だなあ。普通は夜中に起きないものでしょう？」許してもらおうと、さっさと騎士の真似は止めた

ラ・コスタは、本当に残念そうに言う。

普通は、夜中に人の家のバルコニーでお月見なんてしないでしょう？ という反撃を思い付いたが、ルニエは実行しなかった。どこまで彼が本気なのかは判らなかったが、お月見という理由で、今夜彼がこの場所にいたことを責める気など、ルニエにはもうなかった。

でも、ルニエはもやもやっど何だか彼のことをもつとよく知りたくなる。子ども特有の純粹さと、スパイスのような大人っぽさが共存した人格はとても興味深い。この、中途半端に先が読めない反応が探究心をくすぐるのだ。

「家に帰らなくても良いの？」

話を続けるために切り出した話題だったが、ルニエはこの話題のせいでラ・コスタが帰ってしまうのではないか、と言ったあとで後悔した。しかし、普通に考えれば当然の質問であるし、こんな夜中では両親が心配しているだろう。

「両親は一緒に暮らしてない。それに今日は帰っても誰もいないから心配されないよ。といっても、彼は僕のこと心配なんかしないし」

どうもラ・コスタは、誰か男性と二人暮らしをしているらしい。

ルニエの後悔を一瞬でリセットすると、彼は背中に翼でもついているかのように、ふわりと軽く飛び上がり、再び彼の顎ほどの高さがある手摺の上に腰をかける。彼の視線の先には一つ、丸い満月。

なにかを誤魔化すための冗談かとも思ったが、彼は本当にこの場所へお月見に来ているらしかった。一所懸命に満月を見上げる様は、幼いころのルニエに似たなにかを髣髴させる。月は手に入らないものの象徴であり、コルドン氏もルニエに母は星になったと言ったではないか。

ルニエは、今まで感じたことのないほど心が弾んでいた。子ども  
のころ、誕生日の前日に感じたワクワクに近い。新しい冒険でも始  
まりそう。不思議なラ・コスタのすぐ隣で彼の横顔を見つめて、  
これからなにか起こらないだろうか、と少しだけ期待した。彼の繊  
細で壊れそうな表情を眺めているだけで、思わず涙が出そう。綺  
麗なものを見たときに感動するのと似ている。

全然飽きない。このまま、時間が止まれば良いのに、と思ってし  
まった。

「なに？」ラ・コスタは恥ずかしそうにルニエを見る。

「いえ……、本当に魅力的だと思って」

すまして答えるルニエの意図に気付いたのかどうか分からないが、  
ラ・コスタは眩しそうに目を細めた。

「当然さ。月には人を魅了する魔力がある。出始めの満月が色とい  
い、大きさといい、視覚的に一番好きなんだけど、高く昇らないと、  
澄んだ空気を伝わって魔力が降りてこない」

ふわりと風が吹き、二人の髪が揺れる。

「魔力が必要なの？」

「まあね。僕の場合、なければ君とも逢えなかったかも」

「まあ……！」彼が冗談を言っているのだと思った。大げさに驚い  
た振りをして、ゆっくりと微笑む。「じゃあ、満月ではない明日は、  
もう、ここには来ないの？」

さり気なく口にしたが、彼女がいままで口にしたことのない類の意味を含む台詞せじふだった。お月見を理由とすれば、単純に誘いやすかったのだ。それに対してラ・コスタは小首を傾げ、ルニエを見下ろす。その目はなにかを訴えているようでもあり、それを読み取るうとしてルニエも目を見つめる。

「どうして？」ラ・コスタは目を逸らした。

「それは……！」目を逸らされて、つい言葉に力がこもってしまう。「明日もまた、きみに会えればと思って……」ルニエは自分の顔が熱くなるのを感じ、急に恥ずかしくなり声を萎めた。最後の辺りはちゃんと聞こえたかどうか分からない。

「僕に？」

「そう……、駄目？」

今日、出会ったばかりの人になにを言ってるんだろう、と思った。しかも、相手は年下で、それでもまた会ってこんな時間を共有したいと思っっている自分がいるのだ。彼ともっと話したい。彼のことをもっと知りたい。

だが、彼はルニエにとって名前しか知らない人だ。次にまた会う機会は、ルニエが作らない限り、訪れないだろう。

「どうして僕に会いたいの？」

「会って、話をしたいの」

ラ・コスタは、呪いがお姫様のキスで解けると言っていたが、今回、ルニエはそのキスで魔法がかかってしまったのかもしれない。好奇心、という魔法が。

「僕と話を？ どうして……？」納得がいかないように、また質問を繰り返す。

「きみのことが知りたいからよ」

「僕のことをどうして知りたいの？」

「きみに興味があるの」

「僕に……？ 何故？」彼は決まって『僕』を強調して言った。

ラ・コスタが聞き返してくることは、どうして？ ばかりで、このままでは埒が明きそうになかった。

恥ずかしさと後悔することを天秤にかけ、仕方なくルニエは、覚悟を決めて深呼吸をした。それはまだ、名前を付けるのは早すぎる感情だと思える。

それでも、彼と二度と会えないよりは、それでも良いかとルニエは思った。

「わたし……、きみが好きになったみたい」思いのほか、唇はちやんと動いてくれた。

「きっとそれは、月のせいだよ」

また泣きそうになるくらい、ラ・コスタは優しく答える。けれど、どう見ても本気にしていない様子だ。

「そうね。きつとわたし、月の魔法にかかったのね……」

せつかく天秤にかけたのに、恥ずかしさも後悔も味わわなければならなくなったルニエがぼつりと呟く。まるで他人事のようにぼんやりと月を見つめていたラ・コスタは溜息のように一息吐き、座っていた手摺の上に立ち上がる。

「それじゃあ……僕、そろそろ帰るね」そう呟いて庭に飛び降りようとした。

突然の展開にルニエはびっくりして、飛び降りたラ・コスタが落ちたと思い、助けようと咄嗟に彼へしがみ付く。ここは二階のバルコニーで、しかも彼は手摺の上に立っていたわけだから、地面までミータはある。下に落ちたら絶対に怪我は避けられないだろう、と思ったのだ。

ラ・コスタの驚いた顔。

スロウモーション。

浮遊感。

落ちるラ・コスタに引つ張られる形で、ルニエは手摺を乗り越える。そして予想外に小さい衝撃と共に、二人は近付いてきた地面に落ちた。下は、芝生だった。乾いた草の匂い。ルニエは恐る恐る身体を起こし、下敷きになっていたラ・コスタの顔を覗き込んだ。彼は目を閉じて、眠っているようにも見える。

肩を軽く叩いて、小声で彼の名前を呼ぶ。あのときは助けようとして、無我夢中でしてしまった行動だったが、結果的に彼が一人で落ちるよりもルニエの重さが加わった分、さらに悪い状況のようだが、身軽な人物であれば、これくらい飛び降りられるのかもしれない。だが、そんな危険な挑戦をしたことなどもないルニエには、判断がつくわけもない。

「ラ・コスタ……」彼が反応を示さないので、頭を打ったのかもしれない、とルニエは泣きそうになる。

次の瞬間、唇が微かに動き、彼は目を開けた。そしてすぐに上半身を起こしてルニエを睨んだ。「……ってえな。なにすんだよ！」

今度は嬉しさで泣きそうになりながら、ルニエはラ・コスタに抱き付き、彼から乱暴に両手で突き飛ばされた。いきなり抱き付いたルニエもルニエである。しかし、バルコニーで見せた彼の優しさからは想像できない行動であった。

「誰だ……、お前？」

真っ直ぐに見つめる別人のような目は、少し怖い。どこか打ったからなのか、明らかに態度が変わっているように思えた。ルニエは目の前にいる彼の目をじっと見つめる。鋭い視線はルニエを見つめ返したまま、揺るがなかった。

ルニエは驚いた。

彼と視線を合わせたまま、ぶくりとルニエの中で一つの疑問が湧き上がる。彼は誰だろう？ と。そしてルニエはついに、全て

を丸く収めるべく、いままでの記憶と知識を掻き集め、それ相応に自分が納得できる仮説を思い付くことができた。

ほつと溜息を吐く。

「わたしはルニエ。きみは誰？」

「オレは……、ラ・コスタだ」彼は少し動揺して答える。

否定されることも予想していたルニエは、微笑んで優しく尋ねた。

「いいえ、さつきと違う人でしょう。きみの名前は何というの？」

彼はショックを受けたように身を震わせ、しばし沈黙をする。

仮説はそこで確信となった。

「ねえ？」

「……………お前は、オレがさつきと違うやつだって判るのか？」

ルニエは微笑んだまま頷いた。ラ・コスタとは違う真つ直ぐな眼差し、硬めのインタネーション、それだけを取ってもかなり差を見付けることができる。

「ええ、全然違うもの。だって乖離……かいら……いえ、違う人格なのでしょう？」

ラ・コスタがやたらと『僕』を強調していたのも、彼という人格を指していたに違いないのだ。

ルニエの答えを聞いた彼は、恥ずかしそうにルニエを見た。

「ジェイ……、オレはジェイ。いつも、誰も、オレを見てくれなかった。オレが『キレたラ・コスタ』としてしか見られないなら、いつそのこと……」そして彼は顔を伏せた。

ルニエはジェイの頬に手を当てる。泣いているかと思った。

外にずっといたからなのか、やけに冷たい頬だった。

「でも、ルニエは違った」

彼は照れ臭そうに笑う。それはさっきまでとは全く違う、別の少年の微笑だ。

(そう……全然違う。この子は純粹に喜んでいる。そもそも自分が認めてもらえないことに憤りを感じても、怖れを感じてはいなかったみたいだわ)

見つめても逸らされない目が、ルニエにとって嬉しい、よりも、残念、な感情を引き起こす。同じ綺麗な顔をしていても、彼とジェイはルニエにとって同じではないらしい、と判る。

「ルニエ、そういえば大丈夫か？ オレは魔法で傷を治したりできないけど、怪我、ない？」

「あ、ええ、大丈夫みたい……」

ルニエは答え、怪我の心配よりもむしろ、どうやって自分の部屋

へ帰ろう、と思った。玄関から帰るわけにもいかないし、二階へよじ登るわけにもいかない。バルコニーを見上げていると、彼がバルコニーとルニエを見比べた。

「上に戻る？」

「え？」

いきなり握手をするくらいのさり気なさで、彼がひよいとルニエを抱き上げる。ルニエは驚いてしがみ付いた。彼は信じられないことに、そのまま、ふわりと二階のバルコニーに飛び上がり、ベンチにルニエをそつと下ろす。

自分よりも小柄な少年に抱き上げられ、しかも二階まで運ばれたのだ。ルニエは信じられなくて、ベンチに下ろされたのに、彼にしがみ付いたまま離れられなかった。それでも、頭の片隅で、これならバルコニーに侵入するのも容易いだろう、と思った。

「ルニエ？」彼がルニエを覗き込む。

「え、あ、ああ……」

ようやくルニエは引き攣っていた緊張を解いた。目が合うと、ジエイは嬉しそうに数回瞬いて、ふと視線を宙に漂わせる。

「そうだ！ 決めた。ルニエ、目を瞑って」ルニエの手を掴み、首から離す。

まだ中途半端にぼんやりしていたルニエは、大人しく言われたとおり目を閉じた。頬にジエイの髪が微かにかかる。彼が早口でな

にかを呟き、そして左瞼に柔らかな感触があった。

(なにかのお呪い？)  
まじな

よく分からないながらも、握られていた手が離れ、急に彼が飛び退いた気配がしたので、ルニエはゆっくりと目を開ける。彼は俯き気味にさっと視線を逸らした。

「ねえ……」

「ごめん！ あいつ自分勝手に、君の気持ちも考えないでさ……。いまのはなかった……。いや、できればすぐにでも忘れて欲しいんだけど」勢いよく彼は、歌うように答える。

そこにもう、ジェイはいなかった。

「お帰りなさい」ルニエは微笑む。「ジェイのときの記憶があるのね」

「ああ、もう少しだけ早く戻ってこられたら、こんなことは……。あとで彼に、よく言っておくから」

いきなり謝るところから始まったラ・コスタの話は、ルニエには全く要領を得ない。それにしてもラ・コスタは唇にたくせに、ジェイはただ瞼にキスをしたただけなのに大げさだ。

だが、ここはチャンスだ、とルニエは思った。

「気にしてないわ。その代わりお願いがあるの」

やっとラ・コスタはルニエのほうに目を向ける。ぎこちなく首を

傾けて、髪を掻き揚げる仕草は、年齢に合ってなくて逆に可愛らしい。

「そう、相手にされてないってちゃんと分からせないかね。えっと、何だっけ？」

「また会う話よ。前向きに考え直してもらえる？ 『きみ』と会いたいんだけど」今度こそルニエは、しっかりラ・コスタの目を見つめて言うことができた。

しばし沈黙。

「えっと……、しょうがないな」ラ・コスタは左腕の時計を見た。

「明日……ね、夜の十時くらいからで良いなら。ところで、寒そうだね。早く部屋に入ったほうが良い。僕も帰らないと、……じゃあね」

彼は早口でそう言い残すと、暗闇の中に消える。当たり前のように手摺から飛び降りて、カサリという草の揺れる音がしたかと思うと、もう気配は全く消えてしまっていた。魔法学校の生徒はすごい、とルニエはこっそり思った。

丸い満月が綺麗に見えるバルコニーに独り残された少女は、幸せな夢から覚めないようにゆっくりと、暖かい部屋の中に戻った。

外気よりも温かい空気に促され、ルニエの顔は熱くなる。身体も震えた。時計を見るともうすぐ三時。あっという間だと思ったが、実際は一時間ほど、二人は一緒にいたことになる。

(ラ・コスタは、確かに明日も会えると言ったわよね)

彼の言った『じゃあね』という台詞を反響する。

シートの中に倒れ込む。嬉しくて、また眠れそうにない予感がした。

「お嬢様、お目覚めになられる時間です」

ルニエは女中の声で目を覚ます。朝の六時になると女中はまず部屋の外からルニエに呼びかけ、そして部屋の中に入ってくる。彼女はカーテンを開けて部屋の空気とシートを換えなければならないのだ。

だから、彼女が起こしにきたということは、きっと六時になったのだろう。

酷く喉が渴いている。瞬きをし、手足を伸ばし、夢の続きを見ているようにまだ頭がぼんやりしたままルニエは起き上がり、顔を洗って服を着替えようと思った。

「おはようございます」女中が部屋に入ってくる。

「ええ、おはよう……」かろうじてルニエは返事をした。

深呼吸をして立ち上がったが、歩こうとしても身体のバランスが上手く取れない。生まれたばかりの小鹿のように足元がふら付き、ついには膝が折れて、ルニエは柔らかな絨毯の上に倒れ込む。

「お……お嬢様！」

そのあと、女中が悲鳴を上げたようだ。

(顔が熱い……)

床に絨毯が敷かれてなければ、もう少し熱を奪ってくれるのかもしれなかった。

周りはとても静かで、騒がしいはずのなにもかもが掻き消され、ルニエの頭の中ではただ一つ、ラ・コスタが歌っていたあの歌だけが、何度も何度も繰り返されていた。

\*

「ルニエ、私が判るか？ 安心しろ、先生を呼んだからな。もう大丈夫だ」コルドン氏は汗ばんだ手でぎゅっとルニエの手を握り、台詞とは反対に自分は安心してない顔付きで言った。

気が付けばルニエは、自分のベッドで横になっている。いまは何時だろう。彼が邪魔になって、枕元の時計も壁にかかっている時計も見えない。

ルニエは酷く喉が渴いていた。喉の渴きのせいで、何だか喋るときさえ疲れてしまいそうだ。

部屋の扉がノックされる。コルドン氏が返事をする、女中がワゴンを押してなにかを運んできた。その後ろから入ってきた白衣の人物を見ると、コルドン氏の張り詰めていた表情がやっと緩む。

「先生！ お待ちしておりました。さあ、こちらにどうぞ。お知らせしたとおり、今朝、急に倒れたのです。娘は……、娘の容態はどうなのでしょう」

近付いてきた主治医のキュラソーは、ルニエの頬に軽く触れ、微

笑んだ。「熱がありますね。いつもより2度ほど高い。ルニエ、僕が誰か判る？」

ルニエは頷く。彼の指先は冷たかった。

「頭痛はする？ 喉は痛い？」

いくつかの質問に、首の動きだけで返事をする。

最後に彼は、ルニエの目や喉を診た。「風邪のようですね。薬を飲んで大人しく寝ていれば、すぐに治るでしょう」

「そうですか……、一先ず安心しました」それを聞いたコルドン氏は、ほっと胸を撫で下ろす。「娘の具合が悪ければ仕事もはかどりませんからな。それでは、あとはお願いします」さらにルニエを見つめる。「ルニエ、ちゃんとブランキットを着て眠らなかつたのだらう？ 今日是一日、部屋で大人しくしていなさい」そして、ルニエが返事をするのを確かめると、名残惜しそうに部屋を出ていった。

女中が持ってきたワゴンをルニエの枕元まで押してくる。台の上に水差しやグラスなど並んでいるのが見えた。

「水分を取ったほうが良い。飲めるかい？」

提案に対し黙って頷くと、女中がグラスに水を注いでルニエの前に差し出す。キュラーの助けを借りて起き上がり、ルニエは受け取った水を飲んだ。いままで、これほど水がおいしいと思つたことはない。この冷たい水のお蔭で、ちよつと元気が出た気がする。

「ありがとうございます。ちよつと、わたし……、水が飲みたかつ

たの「無駄にグラスをぐるぐる回しながら、できるだけルニエは微笑む。

「それはどうも。……で、君は風邪ね。心配しなくて良い。この時期に薄着で外に一時間もいれば、普通は引くよね。えっと、熱は……38度5分」

軽くルニエの額を触ったあと、鞆から取り出したカルテに次々と記入していくこの医師をルニエは驚いて見つめた。黒い、猫みたいに細い髪と黒縁の眼鏡、ブラウンの眼。これまでただの主治医だった彼が、急になにかの対象に含まれた気がして、しばらくじっと見つめる。

何故、彼は昨夜のことを知っているのだ？

「先生のお名前、何と仰いましたか？」白衣の端を引っ張って、恐る恐る尋ねてみた。

「キュラソーでしょ？もしかして、思い出せない？熱のせい意識は多少あやふやか……、困ったなあ」

「違います。ファーストネームです。わたし知りません」本当に困っているのかよく分からない困り方だ、と思いながら、ルニエは一応睨んでおく。

「ファーストネーム？ どうして？ そんなの知らなくても問題ないよね？」

「……まあ、そうですね。ほかにたくさんキュラソー先生がいらっしゃったら、どのキュラソー先生か判りませんし」

よく分からない理由付けをしてみたところ、彼が一瞬だけ口元を引き攣らせるように笑った。

「医師のキュラソーは僕くらいだと思うけど、しょうがないな、今日は特別に教えてあげる。……僕はケイだよ」

「ケイ？」

「そ、キーパのケイ」その例えがルニエには解らない。「咳はないようだから解熱剤を出しておくね。食後に飲んでちゃんと安静にしておくように。以上」彼はカルテを閉じ、鞆から紙袋を取り出して文字を書き込み、薬を入れてルニエに渡す。

ルニエはやけに準備が良すぎる、と思った。いつもなら、診察が終わって薬が出るまでに数十分はかかっている。診察結果をもとに、この家から薬剤師に薬を発注しているからだ。

それを怪しんでいる心理が顔に出ているのだろうか、キュラソーは苦笑いをする。「この時期、風邪引きが多いから、すぐに渡せるように解熱・鎮痛・咳止め辺りの薬は予め用意してあるんだ。もしかして、念のために咳止めも出しておいたほうが良い？」

「え、……いえ。大丈夫です」

彼の反応が明後日の方向なのは、よく考えればいつものことだったのかもしれない。

「今日はこの薬を一錠ずつ三回、食後に服用して、くれぐれもベッドで安静にしているように」

彼が差し出した紙袋をルニエはじつと見つめる。

ベッドで安静に……、頭の中にその言葉が響いた。それはルニエにとつて都合の悪い条件で、それを忠実に実行するということは、今夜会おうと思っていたラ・コスタと、会えなくなってしまうことを意味する。すると、ルニエがやっとの思いで掴んだ、せつかくの約束が無駄になるではないか。

「あなたもありがとう。お薬を飲みたいから、なにか食べ物を持ってきてもらえる？」

ぼんやりする頭の端で、ルニエは考える。

「はい、分かりました」

さり気なく女中を部屋から追い出すと、彼女が確実に出ていくのを確かめてから、ルニエは上目遣いでキュラソーを見る。

「今日、外に出たら駄目ですよね？」

「……さっきの話、聞いてなかった？ 今日、君がいるのはシートの中」

一応、聞いてはみたが、彼は微笑みながら即答した。しかも、いつの間にやら鞆の中身を片付けて、もう帰る気満々そうだ。ここで逃げられたら大変、と白衣の裾をまた引っ張って、必死でルニエは訴えた。

「あ、あの……わたし、今晚会う約束をしている人がいて。暖かく

しますから、どうしても外に出ては駄目ですか？ もし駄目なら……」

キュラソーは人差し指で、ルニエの鼻の頭をつんと押した。話が途切れる。

「そんなに固い決意なら、僕にわざわざ言わないで、内緒で外に出れば良かったね」

全くその通りの意見だったので、恥ずかしさでルニエは顔を赤くした。彼は微笑んで、鞆を置くと側にあつた椅子に腰をかけて足を組む。話を聞いてくれるというのだろう。

「……そう、ですよ。先生に話を聞いてもらいたかつたのかしら。どうしたら良いのか分からなくて……。せつかくした約束だから、熱があるからといって反故(はげ)にしたくないの。でも、無理をしてお父様に心配もかけたくないわ」彼は微笑みながらルニエの話を聞いてくれている。「どうして熱があるのかしら。すぐに熱が下がれば良いのに……。熱が下がればお父様に心配もかけずに、約束も守れるわ。けれど、そんな都合の良いお話なんて……。ありませんよね？」

上手く表現できない胸の内のもやもやをルニエはできるだけ言葉にしようとす。

「あるよ」「ゆっくりとキュラソーは答えた。

ルニエはゆっくりと彼を見て、ゆっくりと息を飲む。ゆっくりと口を開いて、ゆっくりとゆっくりと瞬またたく。

「えっ……？」

もしかすると聞き間違いである可能性を考え、しばらくキュラソ  
ーの出方を待った。

「けどね、これっていままで何回かやったことがあるのだけど、全  
員に不評だね。あれ？ 全員じゃなかったかな……？ どうしても、  
って頼まれてやったのに、みんな怒るんだ。怖いだろう？」難しい  
顔をして彼は言う。

「それ……本当ですか？ わたし、怒りませんからお願いします」  
ルニエは嬉しくなって、すぐにお願ひした。

「そうだね……、君がそれほど望むならやっても良いけど」

あまり気乗りしなさそうに彼が言うので、多少の引っかかりを感  
じ、一つだけ質問をしておくことにする。

「あの……、そんな魔法みたいなことができるなんて、もしかして  
なにか代償が必要ですか？」

「まあ……、人によると、多少ショックを受けるかもしれないね」  
彼は眉間に皺を寄せた。「あ、僕からの条件ならある。怒らないこ  
と、殴らないこと、君からは誰にも言わないこと。あと仕事を<sup>くひ</sup>減  
するのもなしだよ。……良いの？」

「……はい」

ルニエが答えると意味ありげにキュラソーは微笑み、黒縁の眼鏡  
を外して鞆の上に置いた。彼が眼鏡を外しているのを見るのは初め  
で、眼鏡を外すと意外に童顔で、神経質で近寄りかたそうな感じ

が緩和されるらしいことを知った。

彼はわざわざ断ってベッドの上に腰をかけ、ルニエの前髪を掻き揚げて額に手を当てる。その手の冷たさがとても心地良くて思わずルニエは目を閉じた。

「じゃあ解熱をするよ。君の平熱付近、とりあえず36度にしておこうか」キュラソーは難しそうな声で、しばらくぶつぶつと呪文のような言葉を呟いた。「よし、このまま動かないでくれる？」静かにもう片方の手がルニエの頬にそっと触れ、唇が塞がれる。

彼の冷たい唇。

ルニエは驚いて目を開け、キュラソーを咄嗟に突き飛ばそうとする。彼がそれを見越していたのか分からないが、ぱっと立ち上がるようにして簡単によけられる。

「女性はやっぱり嘔吐きだね。怒らないって言ったのに」彼は不満そうに溜息を吐き、また眼鏡をかけた。

「ふ……普通、こんなことをされれば、誰だって怒ります！」

顔を真っ赤にして、さらにルニエは枕を投げつける。キュラソーは当然のように受け止めると、キャッチボールをしているかのようになり、すぐルニエに返した。

「君は怒らないと思ったのに」彼は呟く。

「どつという意味ですか？」

質問に答えないまま、キュラソーは鞆から体温計を取り出して渡してきた。これで検温をしるというのだろう。ルニエは、彼がいままで使ったことのない体温計を持っていることを初めて知る。疑わしいことだが、手で触れるだけで体温やある程度の状態が分かるらしいので、普段は彼が額や首筋に軽く触れるだけだ。若い娘であるルニエに彼が主治医でついているのは、コルドン氏がそこを気に入っているからである。

しばらくして高い電子音が鳴り、間抜けな曲調に絶句しながら表示された体温を見ると、36度ジャストを示していた。

「え?」

「ほら、上手くいった? 自分で言うのも何だけど、見かけは酷いのに中身は確かな料理みたいでしょ。これでも本業は医師ドクターではなくて呪医ウィッチドクターだからね」

少し自慢げに、おかしな例えをするキュラソーに思わず笑いそうになりながら、ルニエは納得できないながらも落ち着きをようやく取り戻し始めた。よく考えてみれば、彼はルニエの無理な願いを聞いてくれ、しかも何度か確認した彼に同意したのはルニエなのだ。

「ごめんなさい、でも本当にびっくりしたの。……ねえ先生、呪医ってわたし聞いたことがありませんけれど、医師とどう違うのですか」

キュラソーは椅子に座り直して、やはり足を組む。「呪医はね、魔法が使えるんだ」

「あ! まさか魔法って、回復呪文のことですか?」ルニエはあの

とき、彼が微笑んだ意味を理解する。たしかに、これは魔法なのだから。

「そう。健康体に対して回復呪文を使っていると、自己治癒力の低下が見られる場合がある。だから、通常の治療でこれを使うことは望ましくない。正直な話、口移しでなくても解熱くらいできるんだけどね。細かい調節がしやすいし、なによりも患者の負担が少ない。あ、でも、今回は君の反応が予想よりも速かったから、後半の仕上がりは完全ではないかもしれないな。微調整しておこうか？」

慌ててぶるぶる首を振りながら、キスをされたことを思い出してルニエの顔がまた赤くなる。果たして、この方法を知っていたとすれば、ルニエは彼に熱を下げてとお願いしただろうか？ 必死で医療行為、医療行為だと思い込もうとする。

「もう一つ……、先生にお聞きしたいことがあります。先生には弟さんがいらっしやいませんか？」深呼吸をしながら、ふと思いついた話を切り出すことができた。

「いるよ。でもそれがどうしたの？」

ルニエは満足そうに微笑む。彼はラ・コスタの兄なのだ、とそう思った。

同じように冷たい唇……。面影がよく似ている。特にそれは眼鏡を外したときに感じた。繊細で儂げなラ・コスタを日向で培養して、もっと図太くしたらこんな風かもしれない。もちろん、ルニエのこの判断に深い意味はなく、単に彼のほうが髪の色素が濃いせいであろう。黒い眼鏡のフレームのせいかもしれない。

「そういえば、この部屋にいと眠くなるね。ラベンデュラの効果かな」キュラソーは余計に瞬きをして、小さく欠伸をする。ルニエの質問には大して興味がないようだ。

ルニエは驚いた。

「……よく分かりましたね。昨日の香りが残っていたのかしら」

昨晚、眠れなかったルニエがポットの水面に垂らしたのが、安静効果があるラベンデュラのオイルだった。

「解熱はしたけど、念のために一度は薬を飲んでおいてくれる？ それに室温は下がるけど、ときどき軽く換気もすると良い」キュラソーは立ち上がって鞆を手を取った。ルニエの頭を軽く撫でる。「一応、明日も来るけどお大事に」

完全に子ども扱いされている、とルニエは思う。でも、近付いた彼の白衣から微かにルニエには飲めないコーヒーの匂いがして、何故だかやはり彼は大人なのだな、と思った。

掌をひらひらしながらキュラソーは扉を途中まで閉め、再び顔を覗かせる。

「あ、そつだ。今日、人に会うのは何時から？」

「じゅ……十時からです。……夜の」聞かれた根拠が見えないまま、とりあえず答えた。

「そつ、じゃあまたね」

返事を聞くと、夜の十時という時間帯に疑問をぶつけることもなく、彼はすぐに扉を閉めて行ってしまふ。

ルニエは周りに誰もいないことをわざわざ確認すると、自分の頬に両手を当てて深呼吸をする。熱は下がったはずなのに、手は冷たく感じた。

（先生はきつと、ラ・コスタに昨日の夜のことを聞いていたのだから、あんなに準備が良かったのね）

ぼんやりと時計を見た。もうすぐ八時だ。なにか少し食べて、熱い紅茶が飲みたかったが、熱も下がったということで早急に薬を飲む必要もない。眠かったということもあり、もうしばらく寝ていることにした。

シートの中で目を閉じて、キュラソーのことを思い出してみる。

彼がルニエの主治医になって一年以上が経つ。優しく、知的で、ときどきルニエには解らない冗談を言う。初めて会ったときの印象も良かった。

でも、歳はいくつで、家族は何人いて、好きな食べ物だとかも知らないし、ファーストネームだつてついさっき知ったばかりで、ルニエは改めて彼のことをなにも知らないことを知った。

（見た目はまだ二十代よね……。結婚はしているのかしら……。そうだわ、明日いらしたときに聞けば良いのよ）

それから目を瞑ると、だんだんうとうとし始めてきて、お昼少しまえに女中がオートミールを持ってくるまでの間、どうやらルニエは眠っていたらしい。朝に頼んだオートミールも持ってきてくれたはずだろくに、どうやら寝かしておいてくれたようだった。そもそ

も、夜に不十分な睡眠をとったわけなので、昼間眠くなってもおかしくない。

ルニエは、そのオートミールを流し込むようにして全部食べたあと薬を飲んだが、気のせいだろうか、いつもより甘く感じた。いろいろなおことがあって、多少気分が高揚しているせいだろうと思った。

午後に、普段なかなか読む気になれず、ずっと読んでいなかった本を読んだ。昨日までだったら泣かなかったと思われる場面で、不覚にもルニエは泣いてしまった。

いつもとは違う、変な気分だった。

(どうしたのかしら……わたし)

それに、本を読んでいる最中に少しでも気を抜くと、気持ちごとこか遠くに飛んでいってしまい、さっきまでどこを読んでいたのかが判らなくなつて、開いた一番初めの行から読み返してみるが、やはり見覚えがなくて何ページも戻る、という一連の作業を何度も繰り返さなくてはいけなかった。

最後まで読み終わり、本を閉じて本棚に戻してしまうと、どんな場面で泣いてしまったのかさえも忘れてしまった。頭の中が穴の開いた水桶みたいだ。

溜息が出る。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5014ba/>

---

輝ける星

2012年1月14日08時46分発行